

シャーン教授との共同研究として進めているが、今回は、その臺帳の内容及びそれがもつ意味について、中間的な報告を行いたい。報告の中心は、遊牧民集團の構成と彼らに對する課税システムになる豫定である。

創造論者ガザリー

中村 廣治郎

ガザリー(一一一一年没)はイスラム史上最大の思想家の一人であり、哲學を批判し、自らスーフイズムに轉向し、それを正統化するに大いに寄與した。このようなイスラム世界でのガザリー像に比して、ヨーロッパでのガザリー像は大きく變つてきた。中世以來、理由は様々であったが、彼は實際には哲學者ではなかつたかと思はれば疑われてきた。その根本の理由は、彼自身哲學に大いに引かれる所があつたからであるが、それでも今世紀の半ば頃、W・M・ワットらの功績で、正統アシュアリー派神學者としてのイメージがほぼ定着したかに思えた。ところが、最近またガザリーへの哲學思想の影響が強調されるようになり、R・フランクのようにガザリー思想を流出論哲學的に解釋する者が出てきた。確かに、晩年の彼の神祕思想をそのように見ることは不可能ではないかもしれないが、それは神祕體驗の心理學的記述であつて、實在論的に理解されるはならない。その意味で、彼は確かに幾つかの點で傳統的アシュアリー派の枠を越えることはあつたにしても、最終

的にはこの派の創造論に留まっていたと思われる。

洪武から永樂へ・再論

檀上 寛

最近、明初という時代がとみに注目を集めている。一つは、明末清初の社會變動に先行する舊體制の意味を、あらためて考察しようという問題關心から。今一つは、現代中國の起點を明初に求めようという、より現代的課題に根ざした理由による。

この場合、明初體制に對するイメージは、極めて統制的かつ一元的なものとしてとらえられよう。國家と社會との政治的力學のものと、秩序の崩壊ごとに秩序の統括者たる皇帝へと權力が集中し、結果として誕生したのが明朝專制國家である。まさにその意味で、明朝專制國家は中國社會の「體制的歸結」なのであり、明初の社會が統制的かつ一元的なものも、當然といえば當然といえる。

こうした明朝專制國家の最終的完成が、永樂十九年の北京遷都にあることには異論がなからう。ただし、北京遷都と專制體制の完成がどう關連しているのかとなると、その解釋は一樣ではない。というよりも、北京遷都の持つ意義については、報告者を含めて對內的、對外的いづれか一方の觀點に偏り、兩者を總合した上で、專制主義の問題とからめて理解する視座が、いまだ提示されていない。

本報告では、明初の專制主義の高まりのもと、明朝國家による國內外への統制策の一環として、北京遷都が必然化された経緯を論